

日時： 平成21年2月23日（月）
担当： 安全管理対策室
感染管理認定看護師 小澤美紀

第9回 感染予防教室

「インフルエンザについて、もう一度知っておきましょう」



■ インフルエンザの特徴

インフルエンザは法律で定められた感染症

インフルエンザは、国民の健康に大きな影響を与えるおそれがある感染症ひとつとして、法律（感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律）で「**五類感染症**」に定められています。



インフルエンザは突如、強烈な流行が発生する

「スペインかぜ」（1918年～1919年に流行）、「香港かぜ」（1968年）など、世界的に大流行し、多くの死者を出したインフルエンザもあります

インフルエンザの流行時期は12月から3月

日本ではインフルエンザは**12～3月**に流行します。これは、**温度が低く乾燥した冬**には、空気中に漂っているウイルスが長生きできるからです。

また私たちののどや鼻の粘膜は、乾燥した冷たい空気で弱っています。年末年始の人の移動でウイルスが全国的に広がるのもひとつの原因だと言われており、これらの原因が重なって流行しやすい時期となっています。

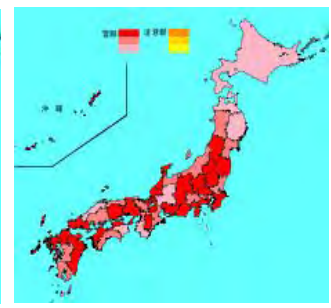
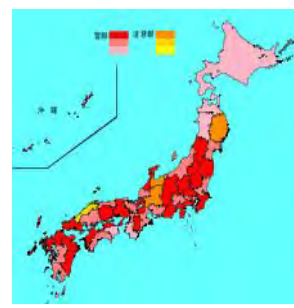
★インフルエンザ流行マップ推移 注意報  警報 

12/1～12/7

1/5～1/11

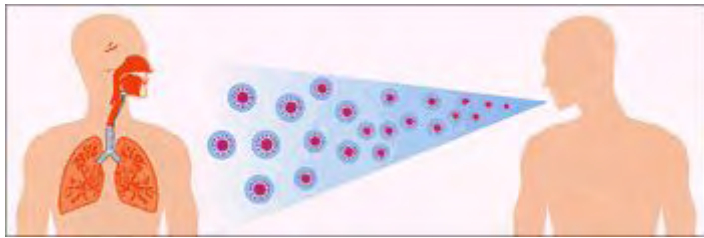


1/19～1/25

2/2～2/8



■ インフルエンザとかぜとの違い

インフルエンザは、かぜに比べて症状が重く、合併症を起こす危険性が高い

	インフルエンザ	かぜ
病原体	インフルエンザウイルス	ライノウイルスやコロナウイルスなどの多くのウイルスや細菌
感染経路	<p>飛沫感染、接触感染</p> <p>インフルエンザウイルスに感染している人のせきやくしゃみでウイルスを含む飛沫が飛び散り、周りにいる人がそれを吸い込むことで感染し、ウイルスが肺で増えることで発症する。</p> <p>また、ウイルスがくっついた手で、鼻や目を触ることにより、ウイルスが鼻や目などの粘膜から体内に入り、感染する。</p> 	同左
病状	<ul style="list-style-type: none"> ・ 38℃以上の発熱 ・ 関節痛、筋肉痛、頭痛などの全身症状 <p>→重症化しやすく、合併症をおこす危険性が高い</p> <p>合併症 呼吸器や心臓に病気がある人、高齢者は、気管支炎・肺炎を併発しやすく、重症化すると脳炎・心不全を起こすこともある。</p> <p>低年齢の子供は、中耳炎、熱性けいれん、インフルエンザ脳症などを起こしやすい。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 38℃未満の発熱 ・ のどの痛み、せき、鼻汁など <p>→あまり重症化しない</p> 

★ インフルエンザの進行

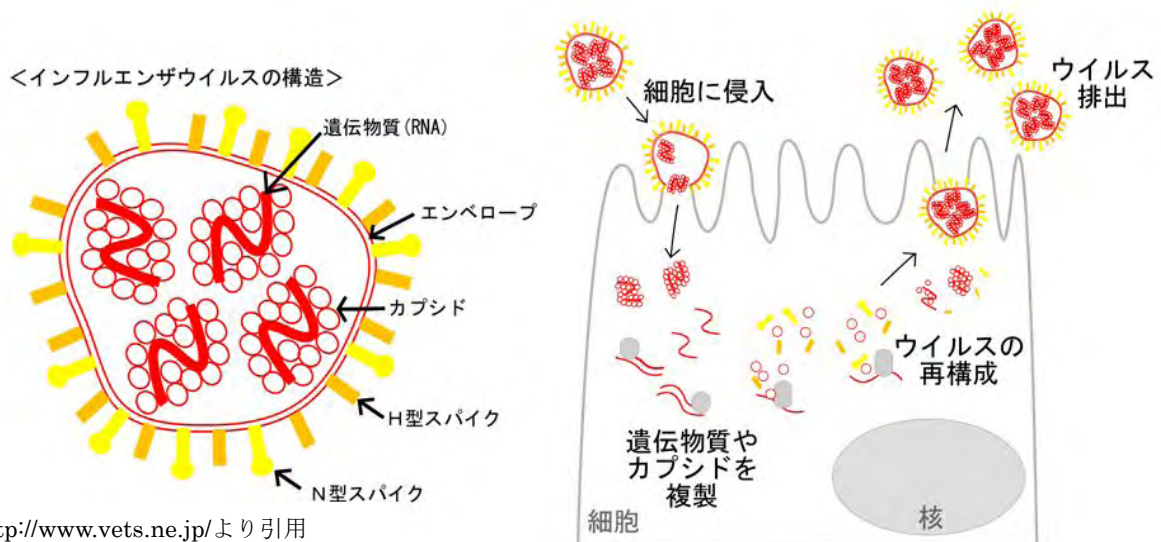
感染から1～3日で発症して、38℃以上の発熱や関節痛などの全身症状が3日間ほど続く。

★インフルエンザにかかったあと、周りの人にうつらなくなるのはいつから？

個人差があるが、**症状が現れてから 2~7 日間**は、ウイルスを体の外に出すと言われています。この間は、まわりの人にうつる可能性があります。また、熱が高いほどウイルスをたくさん出すと考えられています。さらに、小児の方が高齢者よりウイルスを大量に出します。

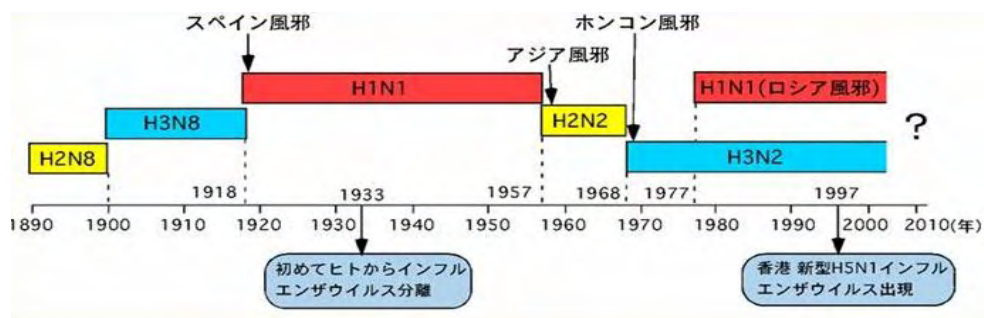
■ インフルエンザウイルスの特性

- ・ 内部で作るタンパク質の違いなどによって、大きくA・B・Cの3型に分類される。
- ・ 毎年流行するインフルエンザはA型。A型は2種類の突起持っている



<http://www.vets.ne.jp/>より引用

- ・ H型スパイク：ヘマグルチニン＝ウイルスが細胞にくっつくときに働く。
「1~16」までの型。基本的に人間に感染するA型インフルエンザウイルスはH1、H2、H3型。
- ・ N型スパイク：ノイラミニダーゼ＝ウイルスが細胞の中で増えて、細胞から出て行くときに働く。「1~9」までの型。B型ウイルスにはない。
- ・ 2つの突起の組み合わせによって型が決まる。



<http://kumamoto.lin.go.jp/event/040925s/hp040925/question.htm> より引用

★ 一度インフルエンザにかかると、もうかからない？

治ってしばらくは抗体があるので同じインフルエンザにはかかりませんが、違う型のインフルエンザにはかかってしまいます。

■ ウイルスを制する治療薬

抗インフルエンザウイルス薬（ノイラミニダーゼ阻害剤）が用いられる

- ・ ノイラミニダーゼ阻害剤は、身体の細胞の中で増殖したインフルエンザウイルスが、**ほかの細胞へ拡がるのを抑える働き**があります。
- ・ ノイラミニダーゼ阻害剤には、「オセルタミビル」（商品名：タミフル）と「ザナミビル」（商品名：リレンザ）の2つがあり、A・B型のどちらにも効果があります。



タミフル（経口薬）



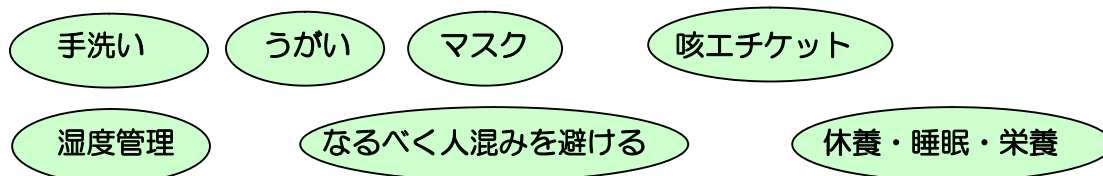
リレンザ（吸入薬）

- ・ ノイラミニダーゼ阻害剤は、**発症から48時間以内に服用**することがポイント。48時間を超えると、体内のインフルエンザウイルスが増えすぎて、ウイルスの働きをおさえることができなくなるため、十分な効果が期待できなくなります。

耐性ウイルスの出現

- ・ 耐性ウイルスとは、治療薬が効かないウイルスのこと。
 - ★ 今シーズンのインフルエンザウイルスは、85%が「Aソ連型」であり、その「98%」がタミフル耐性と報告されています。
 - ★ しかし、その耐性株に対して、今シーズンのワクチンは有効であることが推測
 - ★ リレンザに対する耐性は、現在確認されていません
 - ★ B型ウイルスについては、タミフル耐性は確認されていません

■ インフルエンザの予防



<引用・参考文献>

- ・ 厚労省健康局結核感染症課「インフルエンザ施設内感染予防の手引き」
- ・ 国立感染症研究所感染症情報センターホームページ
- ・ 厚労省ホームページ「インフルエンザQ&A」
- ・ NHKテレビテキスト「きょうの健康 2008年12月号」 他